

報告3

考古学の視点から

---



黒沢 浩  
(南山大学人文学部・教授)

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、南山大学の黒沢と申します。私は、博物館を担当しております、この後、博物館見学に皆さんをご案内することになります。

人類学博物館は、先ほど宮脇先生からのご紹介もありましたが、実は研究所と同じ年にその原形ができています。ということは、博物館も70周年なのですが、すっかりそのことを忘れておりまして、リニューアルした2013年が、自分にとっての出発点になってしまっているということに気が付きました。博物館なのに、これまでの話と違って、記憶が継承されていないということを実に物語っていることになります。

さて、私の話は考古学の話になります。「モノの研究—考古学の視点から」ということで、お話しさせていただきます。それから、私の話の中では博物館の紹介はしないことにしました。この後、博物館をご覧ください、新鮮な気持ちで博物館を見ていただくほうがいいと思いますので、この後の見学をどうぞご期待ください。

この中には考古学関係の方もいらっしゃいますが、考古学と関係のない、あまり考古学のことは知らないという方もいらっしゃると思いますので、手短かに考古学の紹介をさせていただきますと思います。

考古学の定義についてですが、1920(大正9)年に、濱田耕作という、京都大学の総長まで務められた考古学の先生が、『通論考古学』という本を書かれました。この本は今、岩波文庫にも収録されていて、考古学の名著とされるものですが、その中で考古学を「考古学は過去人類の物質的遺物(に抛り人類の過去)を研究する学なり」と定義しています。この濱田先生の定義が出されてから100年経ちますが、この定義を大きく変更する必要はないだろうと思っております。

考古資料としては次のようなものがあります。遺物、遺構、さらに、その周辺環境まで含めた総体としての遺跡です。これらが考古学の研究対象になるわけで、人類学になぞらえるならば、フィールドとしての遺跡、物質文化研究としての遺構・遺物ということになるのでしょうか。

ただ、人類学の研究と大きく違うのは、これまでのお話でもありましたように、人類学の物質文化研究というのは、必ず人というものが見えているわけです。先ほどの吉田先生のご講演の中でも、さまざまな人とモノとの関係の結び結び方について議論が上がっているわけですが、考古学に決定的に欠けているものは、人です。われわれは、人が既になく、人が残したモノでしか研究ができないという宿命にあります。ですから、人類学の物質文化研究では、人／モノがダイレクトに結び付き、直接観察できるのに対して、われわれ考古学は、モノとモノとの関係から入らなければいけないということになります。

と言いながら、考古学の論文を思い起こしてみますと、実はモノとモノとの関係を擬人化し

て語っているところがしばしばあるな、と思いました。例えば、「何々式土器は、何々式土器の影響を受けて」という記述は普通に見られますが、土器が土器に影響を与えることはないのであって、その間には人が介在していることが想定されているにもかかわらず語られていない、そういう語り方をしているということを感じました。

さて、そのモノとモノとの関係ということですが、それを分析する方法として考古学では型式学という考え方を採ってきました。これは生物学、とくに進化論の影響を受けた考え方です。型式学の手順は、まず分類から始まります。世の中にあるさまざまなモノを、遺跡から出土したさまざまなモノを、まずわれわれは分類します。これが型式です。ですから、型式学というのは基本的には分類学です。

そして、次の作業としては、分類された型式と型式との関係性を分析します。これが系統です。考古学では、「組列(それつ)」と呼んだりします。この分類と系統化の作業の総体が型式学ということになります。生物学の中では、分類学と系統学というのは、時に対立する考え方になったりするわけですが、考古学では分類と系統というものが比較的すんなり、何となく連動していると言っていいでしょう。

図1は、型式学の元祖であるスウェーデンの考古学者O.モンテリウスという人の型式学をドイツの考古学者ハンス・ユルゲン・エガースという人が解説したものです。厳密に言うと、エガースさんの説明はモンテリウスの説明とはちょっと違うのですが、それはちょっと厄介なので、ここでは触れないようにしましょう。

モノとモノとの関係を明らかにするのが考古学だと言いましたが、日本では考古学が歴史学の一分野として位置付けられていますので、どこかでモノと人間が接点をもたないといけなわけです。ただ、モノと人、人とモノとの関係の結び結び方というのは実に多様であって、考古資料だけでは一面的な



図1 エガースによるモンテリウス型式学の解説(エガース1981より)

理解になってしまうのではないかと思います。

さらに、考古学は、人とモノとの関係の結びつき方について非常に慎重に議論してきたという経緯があります。例えば、ヒトラーと考古学の関係です。どうということかと言うと、ドイツの歴史言語学者で、後に考古学にシフトしてくるグスタフ・コッシナという人が、1894年に「カッセル演説」として知られる講演をしています。それは、「厳密に地域を限ることのできる考古学上の文化領域は、いつの時代でも特定の民族または部族と一致する」というテーゼを出したものです。

これがなぜヒトラーと関係するかというと、ナチスはコッシナの研究を「世界観の教義」と呼んで、ナチスがヨーロッパを侵略する理論的なバックボーンとしたわけです。つまり、ゲルマン人の遺物の分布範囲は、もともとゲルマン民族のものであると。だから、今のドイツが侵攻していてもいいのだという理屈付けになったわけです。こういうことがあって、実は戦後のドイツ考古学というのは、このコッシナを徹底的に批判することから始まっています。

こうした考え方は日本でもあります。図2は、哲学者の和辻哲郎が戦後になって『日本古代文化』という本の中で示した、銅鐸文化圏と銅剣・銅矛文化圏の対立という有名な図式です。銅鐸というのは、言うまでもなく近畿地方を中心に分布していますので、この図で言うと、右側の円です。左側が銅剣・銅矛の文化圏です。この2つの文化圏が対立しています。

銅鐸というのは、弥生時代の産物ですが、弥生時代が終わるとなくなります。一

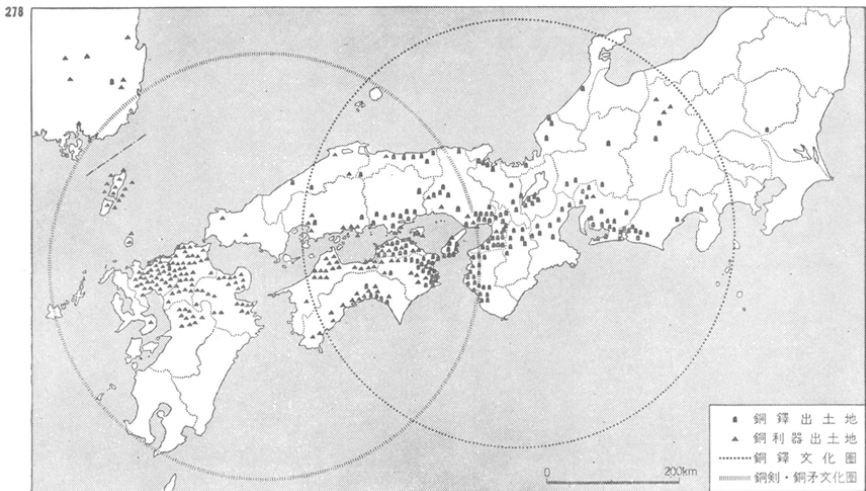


図2 和辻哲郎による銅剣・銅矛文化圏と銅鐸文化圏の対立を図式化したもの(佐原・近藤1974より)

方、剣や矛といった武器類は古墳の副葬品にも採用されています。つまり、九州の銅剣・銅矛文化圏の勢力が近畿の銅鐸文化圏の勢力を駆逐して大和王権をつくったのであるという説明の中で文化圏の対立が語られたわけです。しかし、この説は神武東征伝説と結びつくものとして厳しく批判されました。

考古資料と人間、あるいは人間集団とを結び付けるということについて、これまで考古学では非常に慎重に考えてきました。その辺が、これまでのご報告にあった人類学あるいは民具研究との違いと言っていると思います。

さて、考古学の研究というのは、言うまでもなく発掘から始まりますが、発掘が終わると、その報告書を作ります。通常、報告書を作るには発掘の3倍の期間がかかるとされています。そこには、発掘された遺構・遺物の実測図と言われるもの、それからその写真がセットになって提示されています。

報告書を作る最大の目的は、やはり資料の共有化です。それから、もう一つは、発掘というのは基本的に破壊です。掘ったものは二度と元に戻らないので、これは破壊行為であるということは常々言われることですが、少なくとも報告書の記述の中で、それが、もともとどういうものであったのかということが復元できるように書かれなければいけません。そういう点に、報告書の重要性というのがあるのです。

これは、人類学博物館の学芸員のスタッフが、土器や民族資料の仮面の実測をしているところです(写真1)。実はこの写真はやらせてして、別に2人とも、これで図面を完成させたわけではありません。この報告のために「やれ」といって、写真を撮ったものです。

このように実測図を描いていくわけですが、「写真でいいじゃないか」と言う人もいるかもしれません。しかし、実は、写真と実測図は大きく違ってきます。どうしても人間の目やカメラというのは、真正面からモノを捉えることができません。図3の向かって一番左側の土器は、写真で

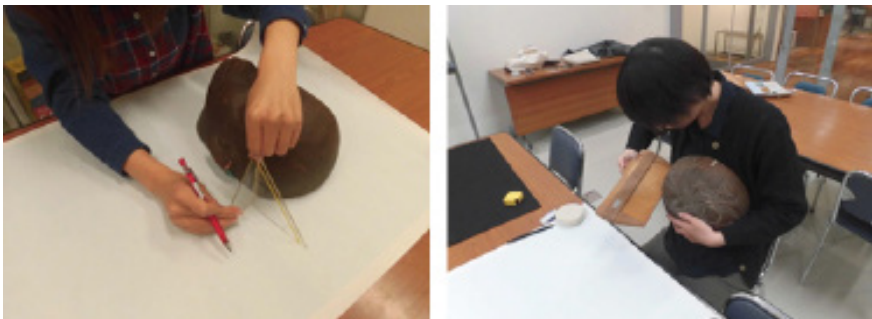


写真1 資料の実測



図3 写真と実測図の違い＊(ただし3つは別な土器)

すが、上から俯瞰しています。真ん中の写真は、口のところは真っ平らになっていますが、よく見ると、底のところは丸くなっています。つまり、ゆがみが出ているわけです。しかし、一番右側の実測図は、口も底も真っ平らになっています。これが真正面ということになります。こういう図を描くわけです。

このように、形を正確に描く、それから、つくり方あるいは文様の付け方の順序をきちんと観察して、それを説明する。これが実測図の目的になります。そういう意味で言います

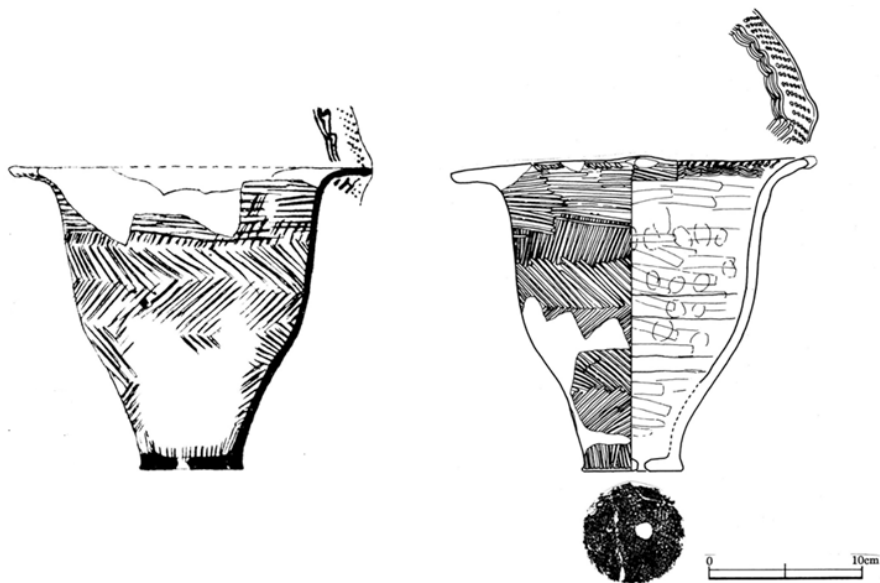


図4 実測図の変化(左は吉田 1934、右は筆者実測・トレース)



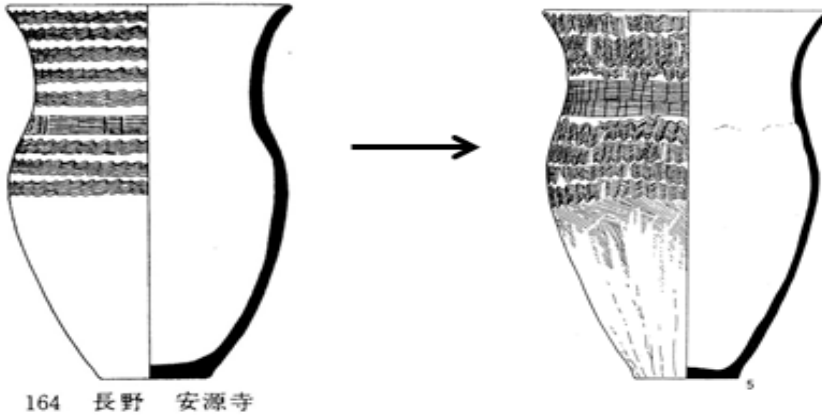


図5 実測図は変わる(左は1964年の図、右は1982年の図)

と、実測図というのは考古学にとって非常に重要ですが、決して客観的なものではありません。必ず主観が入っています。それは、作図者の観察という主観が入るわけです。

例えば、この土器は1934年に発表された実測図です(図4)。その後、私が昨年、名古屋市博物館でお世話になって、実測図を作りました。それを、こういう形で図にするわけです。それをペンでトレースしたものがこれです。違いが分かりますか。実は、1934年の図は間違っていたのです。胴体のところに、くの字の形をした文様が入っていますが、1934年の図は、くの字が一段足りません。これは私が実測して初めて気が付きました。

このように、実測図というのは、誤りもありますし、その当時の研究状況によっても大きく変わります。これは長野県の弥生土器ですが、左側は1964年に書かれた図です(図5)。この図と、隣の1982年の図は何が違うかというと、1964年の図では、この文様がどうやって描かれたのかという判断が全くできないのです。亡くなった考古学の佐原真先生が、われわれが「櫛描文(くしがきもん)」と呼ぶこの種の文様について、その描き方を研究しようとしたときに、実測図と実物の違いに愕然としたそうです。そこで佐原先生は、全部ではないですが、当時知られていた土器の実物を見て回って、文様の描き方を分析しなければならなかったのです。

ですから、われわれは実測図を描いてそれをベースに研究しますが、しかし、やはり表現できないこと、その当時の研究状況によって描かれないことは、実物に再度当たらなければいけません。つまり、モノが残っていないと、新たな視点での研究が成り立たないということになりますし、研究成果の検証ができないということになるわけです。そういう意味で、博物館での保存というのは非常に大事になってくるだろうと思います。

実物の考古資料が保管されているのは、各地の埋蔵文化財センター、大学、博物館であり、

場合によっては個人ということもあります。実際の研究にあたっては、そうしたところに出向き、目的とする資料を熟覧したり図画化したりします。したがって、考古学は資料の閲覧という観点から見ると、博物館を「使い慣れている」と言えるでしょう。

先にご紹介しました濱田耕作の著作の中に、戦前に出版された『博物館』という子供向けの本があります。その本は戦後復刻されて、現在は講談社学術文庫に納められていますが、そのタイトルは改題されて、『考古学入門』になっていることから、日本では考古学と博物館の関係が親和的なものであるということがわかります。そもそも、モノを扱う考古学の性格自体が、博物館になじむのでしょう。

今までの話が考古学の研究状況です。続いて、今の考古学をめぐる状況についてお話ししたいと思います。

今、考古学が博物館を使い慣れているのは、実物資料の確認があるからだと言いました。しかし、もちろんそれだけではありません。博物館では考古学の研究成果を地域史として再構成して、市民に提供する、つまり、研究成果の公開、そして様々な形での活用がなされていることも重要でしょう。とくに考古学の人気は高く、考古学の講座をやれば、常に定員を超えるような聴講者が来ますし、考古学関係の書籍も数多く出版されています。これを「歴史好きの日本人」という国民性に還元することはできないと思いますが、ともかくそういう現象があることは確かです。

昨今の考古学ブームの中で、「土偶女子」や「古墳にコーフン」という言葉を聞いたことがあると思います。シンガーソングライターの「まりこふん」という方が主催する「古墳にコーフン協会」というものがあります。土偶や古墳がブームになっていて、私が専門としている弥生時代なんていうのは、今や隙間産業になっているわけです。

こうした状況は言ってみれば、考古学の研究成果が消費されているということになるわけで、そのことに目くじらを立てる真面目な研究者もたぶんいらっしゃると思うのですが、私自身は、これはこれで良いのではないかと考えています。それよりも危険なのは、こうした一種のポピュリズムの流れの中で、考古学の成果がナショナリズムの中に取り込まれていくことです。

覚えている方もいらっしゃると思いますが、2000年に前・中期旧石器時代遺跡捏造事件というのがありました。これは、日本列島の最初の人類は60万年前にいたという話が全部捏造であったという事件です。宮城県の上高森というところで見つかった石器は、60万年前とされていたが、非常に丁寧に整然と埋められて見つかりました。もちろんそれ自体が捏造だったのですが、そうしたことを基にして描かれていた歴史像というのは、非常に精神性の高い人類が日本人の祖先だと、われわれの歴史はそんな古い時代から優れていたのだという、まさ



に自分たちの自意識を満足させるような方法で、捏造された遺跡が使われてきたのです。

実は、これには後日談があります。大体の考古学者はこの問題に関わって、結構傷を負ったのですが、傷を負わなかった人たちもいました。それはどういう人かということ、修正主義的な歴史観で知られる「新しい歴史教科書をつくる会」の面々です。その中心人物の一人である西尾幹二という人が『国民の歴史』という非常に分厚い本を書きましたが、その始めのほうで、旧石器時代のことがほとんど無視されています。「私の人生観には全く関わりがない」ということで、切り捨てているわけです。結果として、西尾先生は、旧石器時代捏造事件には全く関わりをもたずに済みました。これは皮肉としか言いようがありません。このように、考古学はナショナリズムに取り込まれやすい性質をもっていると言えます。

そういう中で、2つの言葉を紹介したいと思います。両方ともオーストラリア国立大学のテッサ・モーリス＝スズキさんの言葉で、「連累」と「歴史への真摯さ」という言葉です。

「連累」というのは、歴史における事後共犯、つまり、今われわれが生きているのは過去にこういうことがあったからだ、その世界にわれわれは生きているのだという考え方です。それから、「歴史への真摯さ」というのは、いろいろな歴史の語りに耳を傾けるべきだという考え方です。

しかし、考古学で言えば、事後共犯と言われても、その対象があまりにも遠い過去であればリアリティは失われます。あるいは、多声的な歴史の語りに耳を傾けるべきだと言われても、結局、その当事者がいないわけですから、研究者間の意見の相違に回収されてしまう可能性だってあるわけです。

この二つの言葉を受けて、「消えゆくもの／忘れられたものたちの考古学」に思いをはせることに、現在のような状況を乗り越える可能性があるのではないかと考えています。

私が専門とする縄文時代から弥生時代に即して言えば、これまで教科書を含めていろいろな本の中では、弥生時代に入って農耕化、稲作を受け入れていくのは必然であり、それは非常に進歩なのだという語り方があったと思います。しかし、「じゃあ、逆に、その中で衰退していく縄文はどうなっていくのか」という問いは、ありませんでした。この語りは事後共犯的といえるでしょう。「進む弥生、退く縄文」と言われることがあります。「退く」側のことに、われわれは非常に無頓着になっています。ですから、歴史に真摯に向き合い、多声的な歴史の語りを聞くというのは、当事者のいない遠い過去を語るにあたって、これから現在に向かって来る過去だけではなくて、逆に消えてしまった過去、消えていく人たちの物語をちゃんと紡いでいくことなのではないかと私は思うわけです。

先ほど吉田先生の報告の中で、カムイノミを民博でやったというお話がありましたが、実は



図6 オムシャ(明治時代、平山屏山・画)

人類学博物館もアイヌ問題に関わっておりまして、先だって私も北海道の白老でカムイノミに参加してまいりました。その中で、自分でもアイヌ文化というものに関心をもち始めて、少しずつ勉強を始めました。

その中で、私は、アイヌの人たちが、そういう負の、消えゆく運命を背負わされてしまった人たちだのように感じるようになりました。図6の絵は「オムシャ」という、和人に対する恭順の意を示す儀礼の場面を描いた明治時代の絵です。このような絵に見られるように、負の、消えゆく運命を負わせてしまったのはわれわれ日本人なのです。ここにモーリス=スズキさんのいう「連累」をいう歴史のとらえ方が求められます。

アイヌに関して言えば、われわれは和人の立場で語る。それも決して駄目だとは言いませんが、一方でアイヌの立場で語ることも必要なのではないかということです。それが今後、考古学にどのように影響を与えるかということだと思います。

最後に、人類学博物館について言います。吉田先生の言葉を少しアレンジして言いますが、「自文化をつくる東博、異文化をつくる民博」という言葉があったかと思います。そういう意味で言うと、人類学博物館というのは、考古資料と民族誌資料を一緒に展示している博物館ですので、民博や東博とは違う可能性も考えられます。つまり、異文化であろうと自文化であろうと、歴史や文化を相対化できる場になり得るのではないか、そんなことを実は今回の発表で考えていて、思い付きました。ただ、失敗すると、優劣を付けてしまうということになりかねません。そのことに、われわれは非常に注意を払わなければいけないと思います。

以上で私の報告を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

## 参考文献

エガース、ハンス・J

1981 『考古学研究入門』佐原真・田中琢(訳)、岩波書店。

佐原 真・近藤 喬一

1974 「青銅器の分布」『古代史発掘5 大陸文化と青銅器』樋口隆康(編)、pp. 124-132、講談社。

濱田 耕作

1920 『通論考古学』大鏡閣(1984年、雄山閣より復刻)。

モンテリウス、オスカル

1932 『考古学研究法』濱田耕作(訳)、岡書院(1999年、雄山閣より復刻)。

吉田 富夫

1934 「尾張國西志賀貝塚発見の土器に就いて」『考古学』5(1): 17-23。